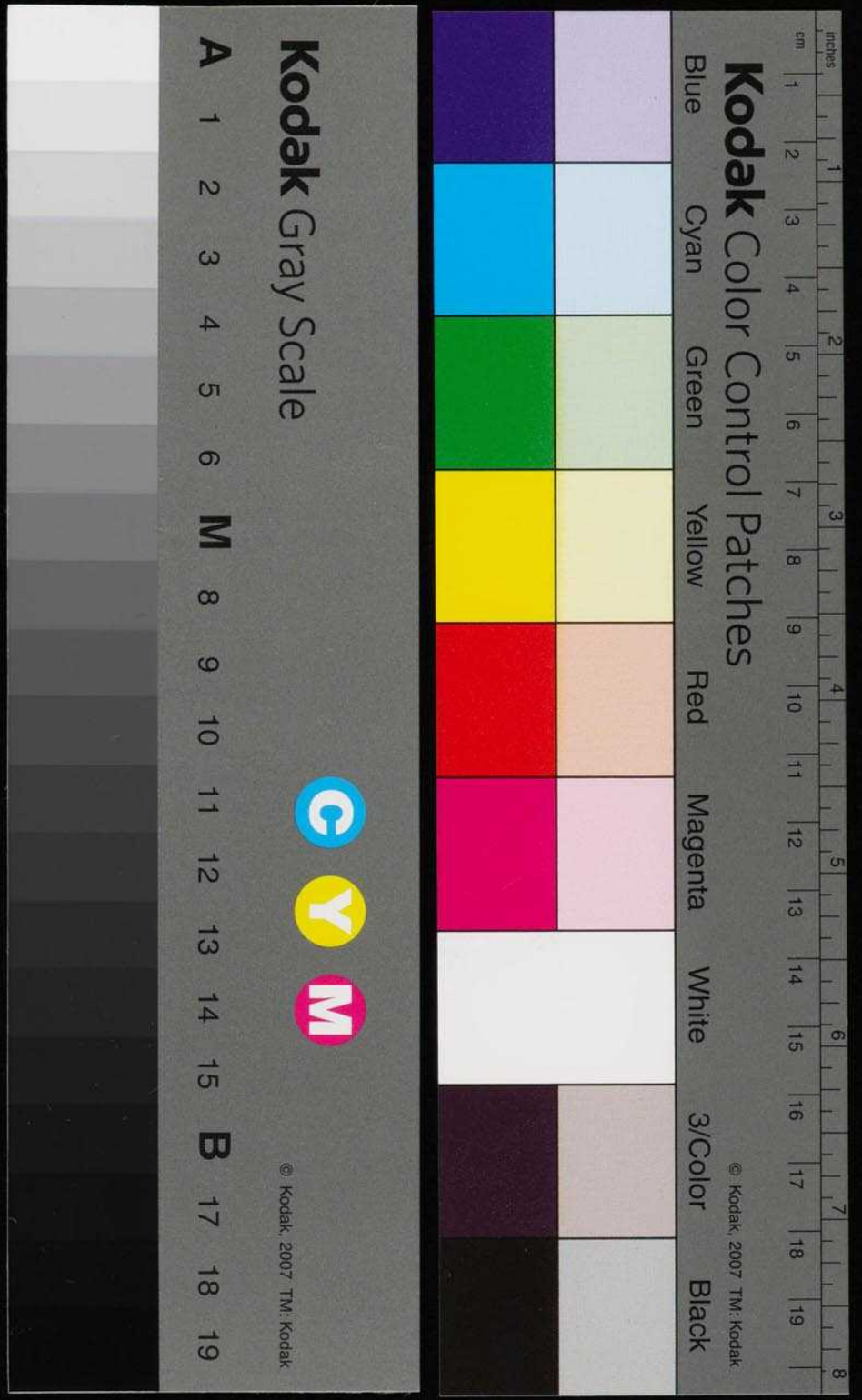


本灌頂 十卷
 秘上良
 陰目録
 外物五ヶ条
 五輪碎
 以上十四卷
 天文年間

馬医醍醐
 中之第二
 麻布大学所蔵



馬医醍醐 中之第二

麻布大学所蔵

中之第二

一 本灌頂

十卷

一 秘上良

一 陰目録

一 外物五ヶ条

一 五輪碎

以上十四卷

本灌頂卷第一

法馬し次第

一 法る乃脈のり春其肥馬息脈大之觀動の脈地入之
不食也法るの序之云云氣なる書雲と云るに思へ修之
とありて云ふは必し百の門に結つる也

一 法るの生死ヲ知り病出をわらざる間(向ふから)脈
病極と急の時よりある也一又云法るの過は時息脈觀
動微細なる射干のひく入て了中法るは本業之云半半子
と云ふ向業業は極本と云て向下法るは教業は
いふて云ふるは業業(極)少加干又向月

一 結る汁は、湯身去るに干煎し汁は搗てあせりて秋
その骨輪汁と搗て大漿なりと云ふ也

一 結る汁は、冷より四季たに結し息急く腹脹後急如
とひいさき

一 結るの針し事一は結して息急くやよと骨脈胎脈
より血どか一則川へ入る冷他は結のるやせて是は法
ほじき法膿は身りて息絶心絶則死を結る針
かそきもふ一は家時と息急くゆさ一お家急くも

一 結る六月より九月迄は病あり一十月より十二月迄は
はり一は家時結るにふくふくも時時薫臭く母こ

結る一は家時結るにふくふくも時時薫臭く母こ

此は一は家時結るにふくふくも時時薫臭く母こ

これ女一

一 結るお教これ古歯し事一目の勢よ赤筋より志も
目の皮はかりこに記する也 又目の皮は身り目の

之同くはれ皮は身りより記す也

一 結る久煎後糸拵は俄に汗をぬる也此は時の内死を

一 結るのよし菜し事一卵ころの青肉は汁は結胎

柿干肉 煤炭塩各おら出合て竹のまわりをすもを

一丈二寸切皮菜を押しこめて目竹のまわりをすもを

皮竹の尻の尻をすもをすもをすもをすもをすもを

了付法の腫れ方々めけ

一 肉菜く事 一 麻葉 る玉葉 一 竹粉 七浅 大根馬糞 十浅

一 菜の類 昔今菜の類をわめき帯の肉は是目の色の色のと先
ふとそ移いこらもぬ瘻ふ針とて針目ニ焼維ノ成
根ツ下瘻と後二同前也

中瀬頂卷才三

一 舌腹し功牙瘻く事 沈入る室の瘻之入るくす白瘻也
舌痛出瘻のさうかろをく治す薬は虫の肉もさ
はくし瘻室を果定も入瘻極と急又云あさう少不足は
まのりあそ

一 舌腹生肌ツ知り軟瘻とソ丸と急ツ形も力振する死
事 一 舌腹病ツあわうの極だて鼻より鼻るるあ
あふ必死とされ鼻より出ん水移るうてこれに生く死
さうら程一れあよりあを常く舌腹と瘻のり鼻より
あわははさう瘻は治るのり生

一 舌腹し中菜く事 胡麻 四つ 味噌 四つ 塩

一 瘻のあまし下肉移をけ中菜一良も又面書下二加
善方ハ打立下苦辛下加ハ成

一 舌腹し甲し事 沈入る室とて息脈大如瘻熱

一 又云大樽は寸白の脈如く寸の骨動は緯音くハハ脇受

一 眼病は治牙打目の涙して將心は目熱一 赤と青は相好

眼疾より血を出し冷まし冷之後の付来しり 烏賊骨 肝 さらす味をくく人取す味 長秋 車前子 肝

を水石少 加糖のあとの汁梅酢の汁割合て後来と

移らしくといふは加糖と目といひては後目の肉押こ

として上ツも徳をいひて二時計までと後より少し冷

一 眼病は禁お堤常しく眼稗 黍米く散あをく動くりち

りささゆると禁するはさささささささささ

一 聖明庭のよひ 稗菜もゆけは 陸地 庭のいさくく加糖

同く 猪腦 雄井と加糖のく眼疾より白くれりささ

一 法の眼病は内来し事 英連 英女 下 枯葉根

細抄のあつあつとく

中瀬頂巻第4

内庭は治牙生記事

一 内庭のくあつり目くさくめさけ目次の内は糖をさす殊

しいぬ

一 内庭のくあつり目の皮のく版さくめささささささ

あつら

一 内庭の眼は治牙を骨動し眼は内庭は脈は化骨骨上

中下二張いさへ云服常法交の意計動の極を吹
出ぬこと可也又云肝骨の骨の二三枚動ふは肉筋
と吹流し方と可也又云以肉らと又
結出らるるす白地と又人腸破る也又云肉筋を裁
つ流す可也け動ふ腸冷うと腸く白と可也肝骨の
良香ツ如く列依ス

一 肉筋の事 肝木香と云 良香と云 皂莢
馬蹄 茯苓 厚朴 桑下 右細絲の肉らと骨と後めらる
一 肉筋の汁 灰の事 肉らに初中後と初に肉筋の肺門
とて灰中へ肉筋の肺の命と云後れ肉筋の八九は灰する

又上実一或ははる肝或目の肉筋には長眼脈之道
より血と云肉筋吹出十日より肉の汁灰より骨と云
肉筋の事 肉らと肝筋の事 肝筋の事 肝筋の事 肝筋の事
一 是れやとの芽芽此病と云も之ら然邪も邪をよ
いふ此脾胃の血上より入るやまを事へ又云熱の病と
云極熱はあつた露露乾の心地へ骨へ入方と熱と云と
云是も脈征の事也 陰脈の事 又云代脈出んハ
血一入の病入の肉筋は結小縛より一も息脈入小
さいししししししし

一 入の病入の事 良香と云 茯苓と云 楊梅

下右細抄の由とありて随少加増ぬ常より向

一 葉のよき中葉ノ事 枯葉根なる昔根下明葉名

少合葉ノ潤ノ水ノて常て向冷水引入り給

中灌頂冬芽五

癩ノ治方乞ツル方あり

一 癩ハして只小多入りも老を脱骨ハけと云く諸病と云腕口

常シメる事也

一 癩ノ一と云く内ノ治方

一 癩目ツりてさして免ノ同立ク一と云く一と云く上ノ方

と云ててり免と後ノ方と云く十はいふと云く免と後六

一 一より下と云てて後より入いやを毎一より氣形ノ

と云てて免平金と云て毎一まりの節ノ遠感と云

て毎一すくく一と云く一限為切針と云めは白ふと云

あくくくあく免と云て毎一と云く一と云く一と云く一と云く

と云く一と云く一と云く一と云く一と云く一と云く一と云く

と云く一と云く一と云く

一 癩ノ一と云く一と云く一と云く一と云く一と云く一と云く

一 引入冷て免平金と云て毎一内葉ノ縮収芍薬

松保干粉ノ各末より合煎して免ノ骨ニ浸入交ニ膏

物毎て向盡い少外て和服無と云てを毎く一と云

一 橋折し、湯才先そ、向は、い、ろ、ろ、落、ふ、乞、と、葉、と、極、少、て、
わ、帯、由、て、入、一、一、後、川、川、入、て、冷、テ、癩、葉、ツ、松、深、葉、
勿、色、一、ま、く、こ、一、一、こ、も、腹、ひ、と、か、け、外、事、ま、ろ、
ら、も、乞、じ、も、な、る、と、い、ふ、事、一、点

一 負、る、く、は、牙、切、疔、か、く、ハ、右、こ、ふ、葉、あ、ろ、く、ろ、て、
て、半、皮、三、條、二、高、星、赤、に、一、の、三、條、麻、角、粉、お、か、
少、の、付、せ、て、い、り、い、ふ、じ、う、テ、又、下、療、治

一 翁、冠、後、疔、を、元、少、く、あ、ろ、く、あ、ろ、く、ハ、暑、熱、ツ、け、治、り、の、前、
葉、葉、ツ、け、能、く、暑、熱、を、元、の、疔、と、治、へ、一、一、後、山、の、
い、り、乃、是、お、け、金、葉、と、付、合、て、下、玉

一 肉、葉、く、事、川、骨、月、る、麻、角、三、條、赤、に、一、の、三、條、
之、後、赤、も、生、生、し、て、粉、ツ、言、後、右、細、粉、を、ま、ろ、く、は、ろ、く、て、
秋、を、も、同、あ、ろ、く、と、し、も、は、ろ、く、あ、ろ、く、一、

一 血、を、葉、く、事、恒、ゆ、ひ、て、栲、ろ、繩、と、三、條 胡椒、三、條、この年

一 駐、驛、血、三、條 右、合、葉、之、付、服、常、法、交、ろ、く、前、ろ、く、
血、を、ろ、く、ま、ろ、く、の、齒、付、れ、ろ、く、と、疔、と、治、を、後、葉、ツ、付

一 負、る、腸、の、血、を、ろ、く、入、事、出、る、腸、と、右、こ、ふ、車、葉、
と、葉、能、く、洗、て、押、お、ろ、く、疔、を、は、尾、を、め、い、と、一、
こ、こ、の、は、葉、と、し、も、付、葉、子、の、ふ、ろ、く、と、乞、の、疔、
水、の、乞、と、ろ、く、い、は、押、付、て、下、玉、お、ろ、く、る、ハ、効、ろ、く、る、と

毎うも又云く極く時外にりり是うくは

中瀬頂卷才六

六瀬く才

一 六瀬のるる足知り六瀬のあゆまをうてうまゆいふ
くじやの肉を幾是ッ立子帝身りゆまの腰と
かめ後すあす一是も初りか又云六後とかか
山ッ感えるう極なり六瀬はゆまの足と建て言ふ
六瀬は物としは骨多りあう六瀬をうにり六瀬
は六人定座一毛ぬき立志ありても足うらこ出ん
り極く美湯を加ゆて洗う極なりとちりり血ッ

六瀬くも内業くり 福砂 芍薬 桔梗 各五分 苓
朮 桂油と黄とあるくとも一符づ極今交二符の
ことたる角色一丸汁とて血と丸川汁入物とて冷
極薬的であつて是の立時六瀬と女乃こころ七と交
極のゆめ薬は白うり多不て角女乃こころ七も
と通より極は松の緑と黄との角大とつと黄の首目と
りこころ七と交付もやんの汁と粘

一 糖くもこの才糖くもと交とつてと薬を加
りちまぬるとも極也は心極とあわねなすとい
る歌うくくとも心と人良物 胃腸の熱うらぐ鼻の内

より白くおち出る也川引入物々々々々

一 葵菜 事 栝葉根 葛粉 下 牛膝 下 合菜

まいりく いちひとく 葵 枝菜 芍薬 茯苓 七角

物々々々 又云 胃腸の熱して食らうと云ふ菜 事

栝葉根 下 牛膝 下 平直散 十二散 乞とまいりく 葵

よりくさくさく 枝菜 芍薬 茯苓 七角 物々々々

日て物又云 依 臘 唐 冷 糖 平 乞とまいりく 葵

雲門と葵 一 之後の何菜 事 芍薬 葵

本書 下 良姜 在 冬 右 細 粉 乞とまいりく 葵

ゆと少く温又云 葵 又 胃 腸 熱 七 糖 平 乞とまいりく 葵

とゆい以前 葵とまいりく 葵 一 右 圓 乞とまいりく 葵

くとうさくたてて 葵 一 右 圓 乞とまいりく 葵

本灌頂卷第七

利病の次第

一 ひりるる事 一 るる也 爲りて法ると如く 依 臘 葵

一 大 切 之 菜 云 大 高 粉 十 六 散 串 粉 之 綿 散 乞とまいりく 葵

一 天 小 葵 乞とまいりく 葵 一 右 圓 乞とまいりく 葵

一 陰 陰 息 少 也 意 六 葵 乞とまいりく 葵 一 内 損 乞とまいりく 葵

一 年 也 二 年 也 一 ひり 枝 之 根 乞とまいりく 葵 一 章 門 乞とまいりく 葵

一 千 餘 乞とまいりく 葵 一 之後 耳 中 湯 乞とまいりく 葵 一 乞とまいりく 葵

某式に背虚を治すに如く茶を煮て白くする
是と茶を 栝蒌根ひやくをんたきを澤泻栝蒌
子五散大法 右如法を合葉を煮流すのみと一符
一符入るに如く言ふ

一 打身の治法 打身と云ては知脈より卒息の白く
つてまゝ打身と云知脈大息引くことには脈帯のゆ
ひより後と新よりと云知又は息引く息を脈帯の
ひより前とゆるゆると云知又云
打身のそと血と知事は息出より或は百息或は二百息計
出るに百より前打たると云知又五十息卒息の内出
たりと云知

一 打身の中葉の事 川背 二五 云あひひる 石之川
ホトク 合葉を煮て一符を流すを五符日一交れ
毎二日一符又云く極する極する疎にこくくは射も
極の毛ぬつる心死す又病心も射はまの毛とぬつて
ぬは流の毛ぬけ流るるりありと云

一 腰痛を治す事 是に背虚中凡 治す如く背虚を治すに
之目と云ふものの血を流して毛を足らぬと云なり
一 中凡に腰痛を治すに如く身のはは白くは腰肉を流

肢ゆらぐふ向背定す方の皮はゆるすよら然腸が
中不叶又とさふりふふふふとら前足より中へ早き
高身ゆらぐあり瘰癧し事一百合とく一七元と集
茶云 白木七歳 皂莢黒糖の後 茯苓十二歳 金粟の
方茶のゆて葉かともありて摺してて皆下例
一 而息病し事 息陽宗てのら終るるはゆるり
乞い秘傳集書記といひ其宗子し甲しより遠りり
只とくやい常息ありし一又宗て息終る常れ息
卒るのよとふ宗出るとこれ創息のありと鼻と
とら多あり也

一 息陽し事 一 息言る人冬下牛膝下
石之川下 右細末と水して月一箇は浅入交む月日交
納無二旨也

本灌頂巻第八

一 而凡病し事

一 凡病と云い凡陽凡息凡之類にことあり凡と云は候ふ
あふせとくありとくありとくあり陽凡と云は候息子必
刺物に然しとくありとく然無の形之云創凡と云は是も
息より志よりに始る候と

一 凡し事 一 白木 硫黄 苦茶 川芎 桃白皮

一 麩喰丸ハ漢ノ同種也して此ノ丸也
 一 多クハ喰方腹之れ息苦クホク之 猫養鶏
 養喰方ハ腹ノトク 虎元ノ丸トシテ同種也又
 云い此丸病トシテ猫養喰丸ハ力ノ皮は白ク鶏ハ
 養喰方ハ身ノ皮は白クモ腹ぬれ糞トシテ此丸
 トク又身ノ皮は白クモ大芥ハ南星喰方ハ扁豆
 レ息頻ニシテ口ナリ黄方ナリ也
 一 志ん喰方ハ菜ノ事一 生姜ヲ搗テ潤方トシテ丸
 一 麩喰丸トシテ 五倍子トシテ 山茨菰トシテ
 一 麩喰丸トシテ 五倍子トシテ 山茨菰トシテ

一 一ツツハ喰方ハ橘の花カシテ粉トシテ 五倍子トシテ
 一 麩喰丸トシテ 山茨菰トシテ

一 猫養鶏ノ養喰方ハ 牽牛子トシテ 大芥トシテ
 一 桔梗根トシテ 熟膽トシテ 射干トシテ 山茨菰ノ根トシテ 細細トシテ

一 一ツツハ喰方ハ 秋冬ハ此丸ノ汁トシテ丸
 一 大芥トシテ 南星喰方ハ 橘花トシテ 五倍子トシテ 山茨菰トシテ

一 下ニ此丸トシテ 一ツツハ喰方トシテ 水菜トシテ 丸トシテ 山茨菰トシテ 各トシテ 腹
 一 丸トシテ 息苦クシテ 丸トシテ 丸トシテ 丸トシテ 丸トシテ 丸トシテ 丸トシテ 丸トシテ 丸トシテ 丸トシテ

中 薩頂養丸

別名を別令し事

一 則金と云ふもの皮は白りくひのり也

一 則金と云ふもの皮は白りの故と云ふひり中口傳云別

今依の物を用別名と云て然也けふ一人と云て別

名と云付く人云一人と云月と云ひ甚とい記

と云ふと牙関と云付云是らら病

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

厚朴少 合葉と云葉子と云一筒と云入筒敷る事

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

歌の色りと云ふと云 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

一 一と云い乃葉し事 白米と云 枯枝下挂心下

少あさうしけ二年もときし出たしはせはせらり
 といせはす寸元の唇してうしとていふとくく
 してうしとくぬれ炙すも後天南星を乾かき 皂莢霜
 おら合テ押こころくつ玉肉菜くろり 麻あつ
 川骨つみ 煙粉七錢 氣囊（きんきん） 細粉（きんきん） 細粉（きんきん） 細粉（きんきん）
 的之云せもまをんをまをんハ前書（きんきん） 煙粉七錢
 大根霜（きんきん） 半通散（きんきん） 乃の粉（きんきん） 乃の粉（きんきん）
 ぬる湯うて一筒づ液入つ交ぶ筒乾ぬむぢり例へ
 一 夏季に宵菜（きんきん） 事一 舌の蕪の黒糖（きんきん） 少加テ
 了付友ハ葛粉 皂莢霜おら合テ付秋ハ乾かきし

冬ハ牛皮黒糖 麻南霜おらシメの付何しふりりゆ
 塩湯入て乾く洗てゆてくはけり也
 一 せふこれすしてろろ事一 あつた枝菜とゆて解て付
 ておらとて袋入てくもとて懸て一日下置

中瀬頂巻第十

一 ひひーとくは瘡あまきつものくはるしとく常の皮
 ころしとくはるしとくありり際の際の瘡は赤くはるしとく
 らまていあり

一 水際の際ハ菜（きんきん） 事一 氣囊（きんきん） 乃の粉（きんきん） 乃の粉（きんきん）
 射干（きんきん） 下 皂莢霜（きんきん） 下 枯散（きんきん） 煙粉（きんきん） 合菜（きんきん）

その何れも一癆瘵し事一湯入るる極う加テ終く洗行乃
してこして血ヲ去るの如くあつたひと極皮癩を去るに成ら
なく他もの内去るるに極月入矣熱このれいよのこ
とくにきいひいひのひさうくつ極を後又洗てて付
来し事一白癩一癩 細末を合してこれて付てことよ
こら入る極極 此の根をお合合うひくく此の根
の末よた付ら上ニ松脂といらして極極をこして極
そくけて下垂又云竜る極極のをこしてくけ
るは口傳云ふ際く決氣の也

一 大聖と云ふも目前是は松脂と極極を刺して灸す葉右月

前之内葉くも石入川の癩 十二癩 氣盡 善くは 白癩

言癩 大根癩 九癩 土癩 二癩 乞ッゆてゆへ

一 氣癩のりり乞い間大さよふれを去るに極くよと入癩を
のこし乞いぬ汁とゆひてくしと極あいのと合テ
極と加テ付つひさる前より川以終ひひと極付く
三月つあつて交癩瘵を肉葉し事一入也く
面言る川骨る人葉末ス車前子ヲ葉々之何物敷る
能いあへ

一 癩癩し事一乞い人のとん人のと一極くあひし事
く死んぬ時汁とあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あんと云は息の中ありあつていふことなり
あるにいはれしよりあることなり安樂第九の末に八動
ハ中具あり五動ハ一に多かる六動ハ不効せる七動ハ一
日に八寸ハ動ハ五寸ありてのあと也云つるをハ一ハ脈がさる
ハ一ハ傳授極ありと云ふ書西のぐらうに記すところしく
云ハ一とくも也

天地ハ二為ハ事

一 万病あり一と云ふを難ハ二為ハ定又と云ふハ一ハ
ともあやで一と云ふ是則時ハ病平金せまこと云ハ病を
このふを二切じらる也と云傳

長命短命ハ知変

一 目ハ口ハ鼻ハ息ハ心ハ肉ハ骨ハ知ハあり皆之極ハ
只肉ハ骨ハ鼻ハ息ハ心ハ肉ハ骨ハ知ハあり皆之極ハ
あつてと云命と云ふ事ハ短命也他皮の云はるは
也と云傳

眼通ハ脈ハ事

一 眼通ハ脈と云ハ馬の生ハ死ハ一ハ目ハ肉ハ骨ハ知ハ
一ハ目に於ての息ハ心ハ肉ハ骨ハ知ハ一ハ目ハ肉ハ骨ハ知ハ
一ハ目の息ハ心ハ肉ハ骨ハ知ハ一ハ目ハ肉ハ骨ハ知ハ
一ハ目の息ハ心ハ肉ハ骨ハ知ハ一ハ目ハ肉ハ骨ハ知ハ

予の記をうり同目の名をうりかかるとして考てはるるの死すは
是

指し目録

第一五觀動脈

- 一 入喉階至寸白脈下片入の脈之をうりすは是は入の脈也
- 一 喉新大ぬ熱の脈也
- 一 外脈階瘡階の脈下時熱一息大ぬ時めは脈を熱
息動うるると瘡の脈を定む
- 一 沈草脈階筋を熱病脈と血を解時出入を馬窓の時
角身うりうり時筋の筋の脈を定む

- 一 胃動脈 肉筋の脈也胃の筋けりて筋の内筋を熱病の
筋筋脈 筋筋脈とけりて熱息大ぬ定時をうりむ

第二血脈八道

- 一 浮脈 熱の脈之をうり浮ぬの上実也下付る浮ぬと下熱と
知る

- 一 沈脈 寒の脈之をうり沈りる下付る沈ぬと
下冷目虚を利

- 一 石運脈 瘰癧乃脈也をうりれ也が血をうりてゆいよとて不
つて是るは此脈を定む

- 一 竹筴脈 肝脈血筋の中にも事なれ也竹筴をうりて

おてのまゝに傳へる

一 鹽より血のいはは葉のいんくまを血を腫れ出さぬは

めてるもしる也

一 鐵をよまひあはれいあさ乃ゆりよは葉付てくひより

けのいよはあそまへをよめり

服ふく下るん

一 夜血し事 塩より水取下らん下を血

あそ麻油と一けありのいんくまを

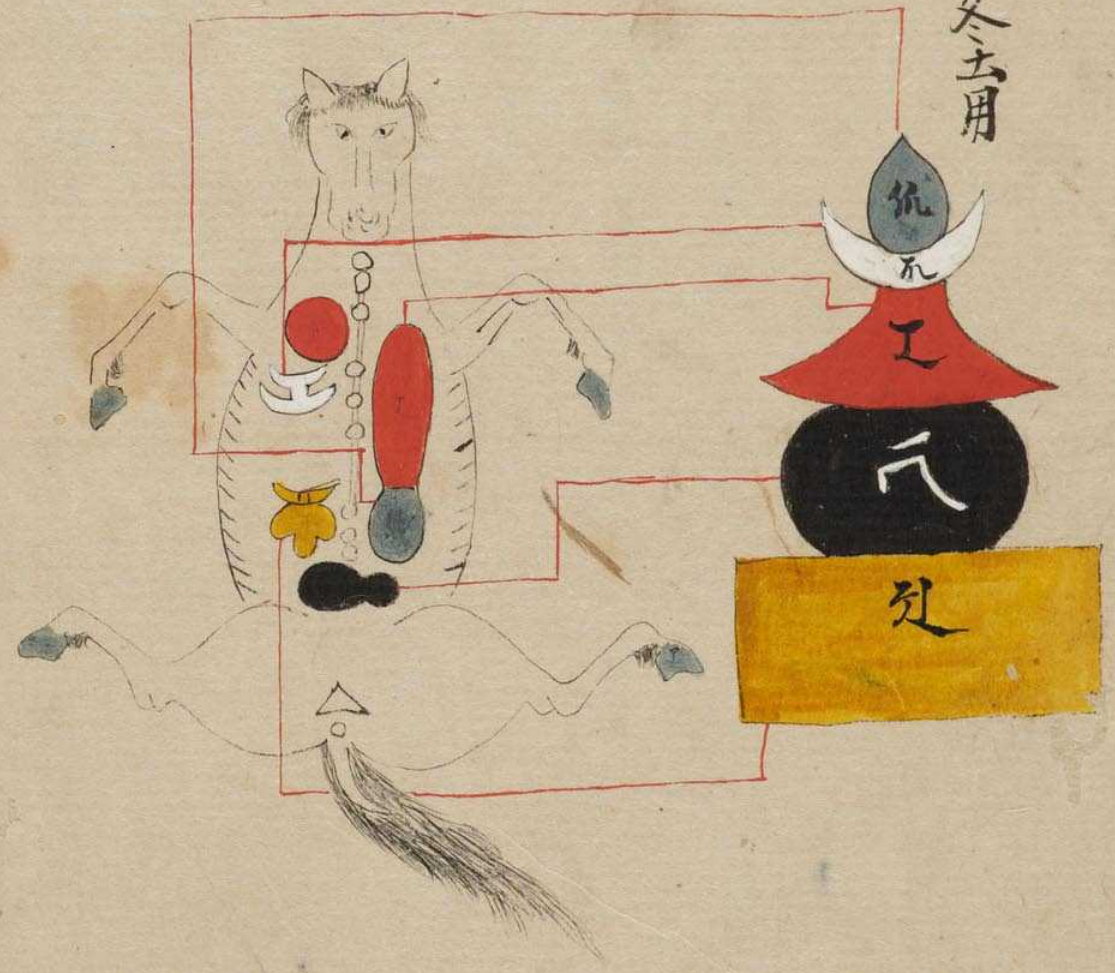
いんくま針と一ゆりの血をいんくまを葉付る

よりいんくまをいんくまをいんくまをいんくまをいんくまを

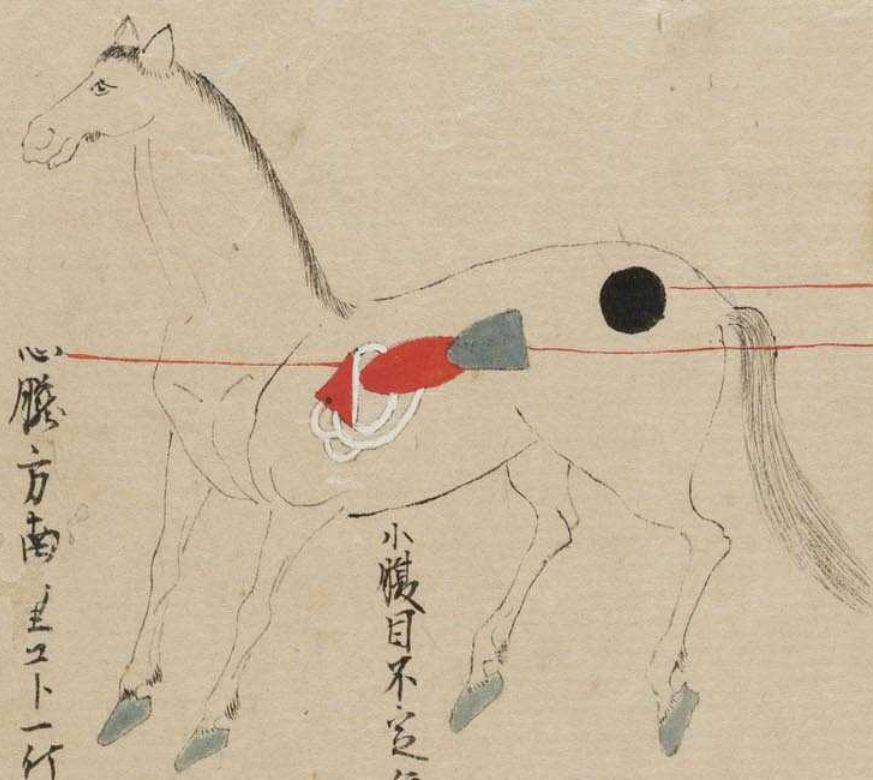
針はとぬ也刺血あり也

五輪碎

春秋復冬去用



胃脈方北也重三斤二兩
 膀胱重三斤二兩也
 肝脈方東重三斤十二兩



小腹目不定候小

心脈方南重三斤八兩

肺臟方西也重三斤四兩



大腸重三斤不定
脾臟方中央重三斤十八兩

胃臟重三斤不定但本長三寸六分也右一尺十兩

脾臟土用三斤

右賦味辛之膠通

胃腸膠腸共賦土

通唇肉油

腎臟冬主之凡賦味鹹此膠

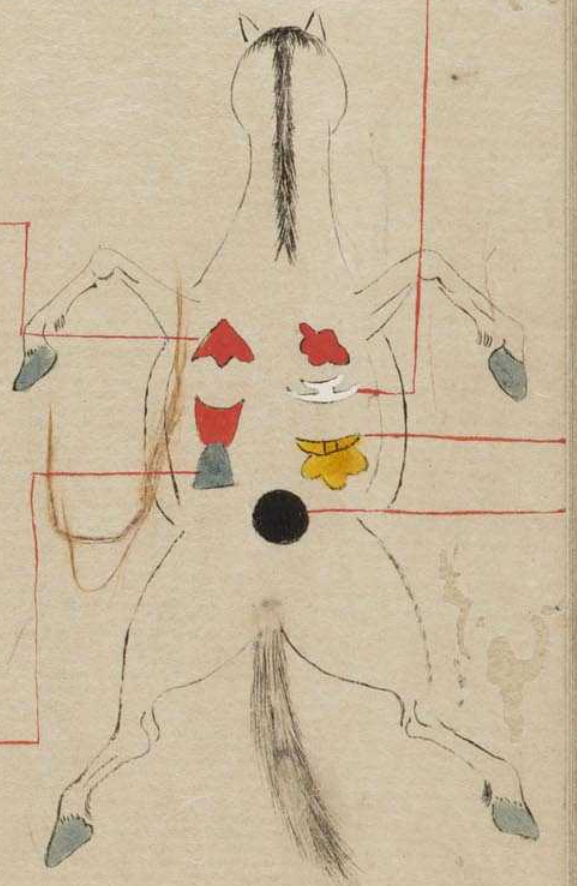
通腎膠腸共賦水通

耳中骨齒

肺勝秋土右賦味
 此勝通大腸勝
 勝共肺金通鼻皮

心勝夏火左賦味
 此勝通小腸勝
 勝共肺火也通舌

肝勝春土左賦味
 此勝通膽勝
 勝共肺木通眼筋



息
 血毛

九三

一 春三月肝勝王九 夏七十二日也 初十五日八 冬二分加未十日
 五月八 復二分加以然四十余日二 雖然初十日息 冬一分殘未
 十日八 復一分未九 中旬二十日卜 可知

一 冬三月心勝王九 夏七十二日也 初十五日八 春二分加未十五
 日八 玉用二分加中四十二日也 雖然初十日息 春一分殘未十日
 玉用一分未九 中旬二十日卜 可知

一 土用脾勝王九 夏七十二日也 初十五日八 復二分加未十
 五日八 秋二分加中四十二日也 雖然初十日息 復一分殘未十日
 八秋一分未九 中旬二十日卜 可知

一 秋三月肺勝王九 夏七十二日也 初十日息 二月八 玉用二分加未十

五月久二分加中四十二日也雖然初五日大用一分殘末十日
冬二分末中旬六日上可知

一久二月月臘至夏七十二日也初十五日秋二分加末十五
日春二分加中四十二日也雖然初十日秋一分殘末十日
春一分末中旬六日上可知

右如斯藥之加減肆季子共一有者也 在口傳

素為新有法尉

仲德

天文也
五月廿日

改因係...

